

## 秋田・秋田城跡

- 1 所在地 秋田市高清水寺内(字鶴ノ木)
- 2 調査期間 一九七八(昭53)年七月～十二月(25次調査)
- 3 発掘機関 秋田市教育委員会
- 4 調査担当者 秋田城跡発掘調査事務所
- 5 遺跡の種類 城柵(官衙)址
- 6 遺跡の年代 奈良・平安時代
- 7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

本遺跡の発掘調査は一九五九(昭34)年から四カ年間、国営調査が実施され多大な成果をあげている。その後調査は中断されたが、近年の急激な都市化現象と史跡保存管理事業に対処するため、秋田市教育委員会が秋田城跡発掘調査事務所を設置し、一九七二(昭47)年から再び調査を開始し、これまでの調査結果では、東西南北約五五〇mの外郭築地塀が不整形に廻っていることが判明している。

木簡が出土した調査地である鶴ノ木地区は、秋田城東外郭線より東方約一〇〇mの城外に当るが、前回の国営調査・その後の調査においても大規模な堀立柱建物群が検出され注目されている地区である。

木簡は三間×七間の母屋に両廂をもつ堀立柱建物跡(SB006)の北東約二〇mの井戸跡(SE406)から出土した。同井戸跡は平面プラン

が掘り込み面で四・三×四・五mのほぼ円形で、深さ一・五mまで約四五度の傾斜角を有し、それより下方はほぼ垂直に二・七mで井筒の上端に達する。井筒の高さは一・二三mであるから井戸全体の深さは約五・四mである。埋土は井側と考えられる崩壊部分はボソボソの褐色土であるが、井筒内は水分を多量に含む灰青色粘土が詰っている。井筒は長さ一・二三m、厚さ〇・一m、幅〇・五二×〇・六七mの厚い杉材六枚からなっている。各部材は側面三個所に方形の穴を穿ち、各々柄板で接合されている。底面には塀がおよそ三段階に敷かれ、その間隙には瓦や河原石が埋め込まれている。上面の掘り方周囲には一間×二間の覆屋と考えられる建物跡と、部分的ではあるが拳大の河原石とが面をなしており、井戸に付随する敷石遺構と考えられる。

木簡はすべて底面に敷かれた塀の直上で検出されている。総数は一六点であるが文字の判読可能は七点である。

### 8 木簡の釈文・内容

- (1) 天平六年月 (釘書き) (315)×30×10 059
- (2) ・浪人文部八手五斗× 勝寶五年調米× (370)×25×7 033
- (3) ・宇大宙宇於大大飽

・飽 飽海郡 飽海郡 最  
 ・最上郡 最上郡□郷 (倍カ) (角材三面) (282)×24×24

秋田市教育 委員会  
『秋田城跡——昭和53年度秋田城跡発掘調査概報——』

井筒内からは木簡とともに須惠器杯三点と土師器杯一点が出土している。須惠器は回転ヘラ切りで切り離し、二次調整を施さないものの二点と、底部全面を回転ヘラケズリしたもの一点である。土器の他に井戸底面に敷かれた埴に龍と、弓矢と人物の墨書絵が描かれていたことは特筆に価する。

(458)  $\times 40 - 35 \times 10$  019

(7) 解 申進人事合五人

・勝寶四年七月廿五日

(398)  $\times 35 \times 11$  081

(6)

天王御為

五百

大國王御為五     
 若國

父母二柱御為五百〇〇  
過去見在眷屬御為五〇〇

(5)

・下野国河内郡□部郷□×

☐ (緑力) ☐ (緑力) ☐ (緑力) ☐ (緑力)

☐

X

280×30×9 081

(4)

「而察察察察察察之之之之灼灼灼灼灼灼若若」

458×26×9 019

秋田城跡発掘事 「秋田城跡出土の木簡」(考古  
務所・平川南 学ジャーナル、一六〇号)

一九七九年  
(小松正夫)

